

経済カテゴリーの形成（発生）と経済解釈

中 尾 訓 生

一、問題意識

社会の再生産は、二つの要素の再生として把握することができる。それらは、構成員を統括している基本関係（これは構成員の相互コミュニケーションを可能とする場を提供している。）と構成員の衣・食・住を確保する社会的物質代謝（経済システム）である。資本主義社会の特徴はこれらの要素が不可分一体化しているということである。

社会の基本構造は「経済システム、基本関係」という二つの要素によって組み立てられている。これら二つの要素の関係によって社会形態を明確にすることができる。資本主義社会の基本関係は次のように規定される。基本関係＝価値実践の相互作用＋表現体系・解釈体系として。私は基本関係をマルクスに依拠して、(1)人格的依存の関係。(2)物的依存の関係、という二つのもを考えている。マルクスの価値形態論は(2)を借定しているのである。(1)は血縁的、民族的、宗教的、あるいは軍事的関係であり、資本主義以前の社会のそれである。この場合、基本関係が経済システムを規制している。(2)は貨幣によって結びつけられている関係であって、資本主義社会のそれである。この場合は、基本関係と経済システムは不可分一体となっている。¹⁾

1) 拙稿 「資本主義社会の再生産と人権観念（上）」『山口経済学雑誌34巻3・4号』

さて、これらの要素は並置しているものと考えすることはできない。経済システムは基本関係（場）によって包摂されている。「包摂」は経済システムを遂行している主体が基本関係によって規定されているという意味である。そして資本主義社会ではかかる主体が、基本関係を形成・維持せしめてもいるのである。資本主義社会の経済システムを实践（主体）という側面からみるとこれは、価値実践の相互作用とすることができる。

経済システムが作動していること、つまり財の生産・分配・消費の過程が連続的に繰り返されているということ、これはこの過程に含まれている商品交換が連続的であるということでもある。日常、幾度となく繰り返される商品交換、つまり商品の売り、買いの行為は価値実践の基本形態である。かかる日常的行為が基本関係を維持し、形成している。²⁾

商品交換の拡大・（生活領域への）深化がブルジョア社会の基本関係を形成・確立していくことはマルクスが「共産党宣言」で鮮明に語っている通りである。³⁾

マルクスの再生産論の他と異なる特徴は、基本関係の形成・維持を社会の再生産の不可決の要素としている点である。社会の惜定は基本関係の惜定ということになる。マルクスの理論的苦闘はこの「惜定」にあるといっても過言ではないであろう。

さて、社会の再生産をみるためには、どうしても基本関係の維持・再生を

2) 拙稿 「資本主義社会の再生産と人権観念(中)」『山口経済学雑誌35巻5・6号』

3) 「ブルジョアジーは歴史上において、最高度に革命的な役割を演じた。ブルジョアジーは支配権を握ると、一切の封建的・家父長的・牧歌的諸関係を破壊してしまった。ひとをその生まれながらの目上にむすびつけていた、色とりどりの封建的なきずなを容赦なくひきちぎって、人と人とのあいだには、ただ剥き出しの利害、冷酷な「現金勘定」以外になんらのきずなをも残さなかった。宗教的な情熱や、騎士的な感激や、町人的な人情などという神聖な感情を氷のように冷たい利己的な打算のなかに溺らせてしまった。人格の尊厳を交換価値のなかに解消させ、さまざまな既得の特権的自由、ただ一つの無責任な商業の自由とおきかえた。……ブルジョアジーは、家族関係からセンチメンタルなヴェールを引きちぎって、それを純然たる金銭関係に還元してしまった。」K・マルクス『共産党宣言』塩田・訳 37頁

把握しなければならない。如何にして把握するか。まず、経済と基本関係という二つの要素を不可分離にその身に刻印している経済「主体」が考察されることになる。「基本関係」は「社会」と「個々の主体」を結ぶ役割を果たす。このカテゴリーの重要な意義はこの点にある。

しかし、「主体」の考察は、いざ考察するだんになると主体の何を考察するのかということによって考察の「対象」を画定する困難さに逢着する。この困難は次のようにして回避される。二つの要素を遂行している「主体」の価値実践を、しかもこの実践が意識的、無意識的に作っている表現体を考察の対象とすることで回避することができる。例えば、X君を理解するために、X君自身に語ってもらうとともに、彼がどんなところに住んでいるか、どんなものを食べているか、どんな服を着ているか、どんな本を読んでいるか、どんな仕事をしているか、等々を私達は、調べるであろう。彼の住居、食事の内容、そのスタイル、服装、・・・は、彼の実践を、したがって彼自身を表現しているところのもの（表現体）である。

これらの表現体は、それぞれに受信者によって意味を付与される（表現体の発しているものの解説）のである。受信者は彼自身の生活経験からこれを解説するのである。

しかし、表現体をバラバラのものとして解説するだけであるなら、つまりそれぞれが有している意味を統一的に体系化することができないならば、X君を理解することはできないであろう。誤解することにもなるであろう。逆に言うならば、これらの表現体はX君において（X君自身が表現体の体系化を意識しているというのではなく、X君の個々の実践が体系的に一つの意味を有しているということ）統一され、体系化され、或る一つの意味を発信しているのである。体系化しているものこそX君自身は認識してはいない「X君」なのであるということになるであろう。X君を理解するためには、X君の生活と受信者の生活を包括しているものを捕捉しなければならない。これが表現体を体系化している。

したがってX君を理解するためには更に次のことを注意しなければならない。

体系化されているX君の実践の表現体から読み取ったこととX君が自己の実践（生活）について語っていることの間には存在している「ズレ」である。

「ズレ」は、個人とは全く異なった構成を有する、一つの独立の存在としての「諸実践の相互作用の体系」（X君、Y君、Z君……の実践の直接的、間接的な相互作用）と個人（X君の実践、あるいはY君、Z君、……実践）が全く別の存在であるということから生じている。

すなわち、X君にとっては所与であるカテゴリーを使って、X君は自らの実践（生活）を他者に説明する。しかし、カテゴリーは諸実践の相互作用から形成されてきている。

したがって、彼が説明しようとしている「生活」がすでにこれらカテゴリーによって性格づけられているということになる。カテゴリーの形成を問題にしないならば、彼が把握していると思っている自分自身の生活は極めて一面的なものであるということに気がつかないであろう。もし、X君が現実の生活に肯定的であるなら、彼は、既にそのようなカテゴリーを認識対象として選び取っているのである。彼は現実の生活をそのままに認識対象としてしていると思っているのであるが。彼にとって生活を説明（解釈）するということは意識的行為である。しかし、その説明内容は彼自身は気がついていないのであるが彼の実践によって性格づけられている。⁴⁾

このことを明確にするためには彼が説明のために採用したカテゴリーの形成を問題にしなければならないであろう。X君から離れて資本主義社会に戻

4) 生活領域における諸実践の相互作用の体系と価値実践の相互作用の体系との関係という社会の再生産を解明するためには避けることのできない問題が存在している。特に実践の「正当化」は生活領域によってリアリティを与えられる。したがって、価値実践によって遂行されている経済システムと生活領域はそれぞれに統括している基本関係を異にしておりながら併存しなければならない。つまり、価値実践の優勢は生活領域の関係を包摂していくのであるが、価値実践は生活世界によって正当化されるのであるから包摂してしまうわけにはいかない。生活領域は文化、伝統をここで濾過して生命を与え、再生しているところである。かかる生活領域と経済システムの併存はいかにして果たされているか。この点については、稿を改めて論じることにはしたい。拙稿、「販売広告と社会統合」『山口経済学雑誌37巻1・2号』

ることにしよう。X君の場合、X君が実践し、解釈するという想定は受容されるであろうが、社会の場合、社会を支えている実践者と解釈者は分離している。つまり分業が確立しているという想定の方が一般的であるだろうが、本稿ではこの点については、ふれない。

本稿が問題としている「経済カテゴリーの形成と経済解釈」は、直接的には上述の「ズレ」に関わっている。「ズレ」とは価値実践の相互作用の表現体系と価値実践の解釈との不一致である。経済カテゴリー（商品・貨幣・資本・利潤・等々）は価値実践の相互作用によって形成されているのであるから、それらはこの表現体系に位置づけられることによって論理整合的意味を私たちに示すのである。

解釈は、実践を正当化するために提示されるのだから、そのために採用された諸カテゴリーはその意味内容を解釈者によって歪曲されることになる。換言すると、解釈は解釈者の個別の実践に制約されて価値実践の相互作用の一面を捉えるにすぎない。この点については一つの例としてマルクスによる先行者の「資本」カテゴリーの批判のうちに明確に示されている。⁵⁾

個々の価値実践者が自己の実践を正当化するということは価値実践の相互作用から結果する現実の諸々の問題を容認する、あるいは弁護するということにならざるを得ない。

「解釈」は他者に納得してもらうためには（ブルジョア社会では）論理的でなければならない。論理的であるということは、その解釈は議論可能であるということである。自由と平等を規範とした人々の相互コミュニケーションの深まりは「論理性」を守るべき彼らの約束事とするのである。

実践の正当化が解釈の主眼であるのだから、当然、解釈を組み立てる論理は実践の質を問うところの規範的論理であろうとする。

しかし、価値実践の相互作用から結果する現実を容認せざるを得ない価値実践者の解釈は依拠している規範が動揺してくると「科学」の名による形式

5) 拙稿 「資本の諸変態とその循環」『山口経済学雑誌31巻1・2号』

論理、つまり規範を出来るかぎり解釈から追放するという傾向をもって来る。

このように表現体系と解釈との間には「ズレ」が生じることになる。そして「ズレ」の拡大は価値実践に対する批判となり基本関係の不安定性を増すことになる。基本関係の維持・再生の把握ということは、実際的には「ズレ」の摘出という面からのアプローチということになる。この「ズレ」については、人権概念の二重性として既に論じている⁶⁾上述しているように、このようなアプローチは基本関係を「価値実践とその表現体系及びその解釈」と規定していることを基に成り立つ。本稿は資本主義社会の基本関係について考察する。ただし、経済カテゴリーの形成という視点から実践の表現体系と群盲象をなでるが如き、その一面的解釈に至らざるを得ないことについて記号論的に考察する。

二、実践とカテゴリーの形成

経済システム（＝価値実践の相互作用）の認識は経済諸カテゴリーの形成を把握することである。これは、ブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判をすることでもあるし、彼らの解釈の一面性を衝くことでもある。彼らは自らの認識の仕方については意識的ではない。彼らは自らの実践の解釈には意識的に相手を納得させようと努力する。

経済システムと経済カテゴリーの関係というようなことは、すなわち、経済システムの認識というような問題は、カテゴリーの形成を問題にしない彼らには存在しない。彼らにはカテゴリーは与えられているのである。彼ら自身は全く意識していないのであるが、彼らの解釈は容易にイデオロギーに転換する。

6) 前掲1, 及び「資本論における実践, 批判, 論理の諸相」『山口経済学雑誌34巻1・2号』

彼らは対象（経済システム）を解釈するために諸カテゴリーのなかから自己の実践に応ずるカテゴリーを選び取る。この選択という行為は彼らにとっては無意識的である。

経済諸カテゴリーは経済実践の表現体である。マルクスはこの点に着目して経済実践（労働）の二重性（価値実践と使用価値実践）を認識したのである。次のように言うことができるであろう。諸カテゴリーを二様に分類することができるのは、諸カテゴリーを読み取る範式、あるいはコードというようなものが二つ存在しているということである。

私は実践の二重性に照応してそれらを価値範式、使用価値範式と呼んでいる。価値範式の下では説明すべき対象は全て量に還元される。

使用価値範式の下では対象は人間の欲求に結びつけられる。したがって、事物はその具体的属性でもって把握される。

実践の二重性は主体にあって内的に拮抗している。資本家が資本家である限り、かれは価値実践者である。プロレタリアートは、資本主義社会を支えている一方の柱であるという意味で価値実践者であり、他面ではその社会を克服しようとしているという意味で使用価値実践者である。彼らをプロレタリアートと規定するのは使用価値実践である。実践の二重性を内的に拮抗させているのはプロレタリアートである。

価値実践者というのは価値実践を優先させている主体であり、使用価値実践者とは使用価値実践に重きをおいている主体である。価値実践者が同化・適応する対象と使用価値実践者が同化・適応する対象は、実体的には同じであってもそれに対する彼らの認識の仕方は範式の相異により異なっている。それは対象を認識するために選び取ったカテゴリーが違っていることによる。あるいは、次のようにも言えるであろう。同化・適応する対象に付与する意味が違っていると。しかし、認識の相異は、範式の相異にもとづくだけでなく、それ以上に認識対象の相異によっている。

すなわち、価値実践者と使用価値実践者は認識対象を異にしている。前者の認識対象は、価値範式によってまとめられている諸カテゴリーであり、後

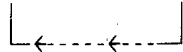
者のそれは、使用価値範式によってまとめられている諸カテゴリーである。対象を認識する仕方の相異は認識対象それ自体が相異しているということによっている。実践の二重性は対象把握（認識）の二重性ということにもなるのである。つまり、実践の二重性によって認識対象が二様に、そしてそれを認識するための範式が二つ存在している。したがって、経済システム（価値実践の相互作用）に対する人々の認識は四通り存在することになる。⁷⁾

これらの四通りの認識の仕方は、I, II, で示しているように対象にたいして能動（同化）的であるのか、適応（順応）的であるのか、という実践の違いによって違っている。⁸⁾

もちろん、現実には彼らはI, II, を内面的に拮抗させているから、認識対象、及び範式を混在させている。

I. 人間の本源性→使用価値実践者→対象（社会）

II. 価値実践者→対象（社会）



これら四通りの認識の仕方は基本関係を擁護、あるいは批判に向かう解釈を生み出すことになる。このことから「社会の再生産（価値実践の相互作用）」の把握は人々の認識の仕方（認識対象と認識するための範式）そのものを認識しなければならないということになる。すなわち、人々の認識の仕方（対象をあるがままに認識していると彼らは思っている。）がまた社会の構成要因でもあるから。⁹⁾

7) 前掲2,

8) 拙稿 「不変資本と可変資本」『山口経済学雑誌24巻1・2・3号』

9) マルクスの価値実践の相互作用の認識の仕方はどのようなものであるのだろうか。彼は「商品」「貨幣」「資本」の基本的カテゴリーを価値実践の相互作用の表現体としている。

したがって、彼の認識対象は実践と表現体としてのカテゴリーの両者である。彼自身の語っているところによると各カテゴリーの論理的繋がりを明確にしていくこと、つまり「上向の叙述」をしていくことが認識なのである。この論理的繋がりを推進せしめているのは実践の二重性である。換言すると価値実践と使用価値実践を拮抗させている主体である。「上向の叙述」について彼は次のように言う。

J・ミルは、労働の対象的諸条件（原材料・労働手段）を資本と規定している。

彼は、次のように述べている。「例えば、鹿を殺す野蛮人が彼自身の弓矢をもってそれを殺す場合、彼は、労働と資本との両者の所有者である。」¹⁰ミルのこの例示を手掛かりに人々の経済システムを認識する仕方をみることにしよう。

生産は、いかなる社会形態のもとでも行われている。ところで、生産は、労働と労働の対象的諸条件の結合であるから、「資本」は、生産の行われるところ常に存在しているということになる。ミルは、生産の超歴史的内容と「資本」カテゴリーを結びつけている。

「資本＝労働手段」とするとき彼は、いかなる表象でもってこれら二つの要素を置き換え可能なもの（等しいもの）と判断したのであろうか。

例えば、人間の欲求を充足させるものを生み出すところの労働を助けるもの、そしてこれの助けによって生産量は増大する、というような表象であろう。このような表象からの「資本＝労働手段」という説明は、実践（労働）対象を人間にとって役に立つもの、あるいは人間の欲求を充足させるもの

「経済学的諸カテゴリーを、歴史上それらが規定的なものであった順序にならばせることは、実行もできないしまたまちがいであろう。むしろそれらのカテゴリーの序列は、それらが近代ブルジョア社会のなかでおたがいにたいしてもつ関連によって規定されるのであるが、この関係たるや、それらのカテゴリーの自然的な関連としてあらわれるものの、または歴史的発展の順序に照応するものの、まさに逆である。ここで問題なのは……近代ブルジョア社会のなかにおける経済的諸関係の組立なのである。」（K・マルクス「経済学批判序説」【経済学批判】大内・武田訳）

ここで述べられているように「上向の叙述」を規定するものは近代ブルジョア社会の経済システム、つまり「価値実践の相互作用」である。「価値実践の相互作用」（社会）を惜定するのは再三述べてきたように実践の二重性である。実践の二重性を表現しているところのモノ（表現体）が商品であり、貨幣、資本なのである。表現体としてのモノとは、実践の対象である。これらのモノが価値実践の範式と使用価値実践の範式によって分類されている諸カテゴリーの対象物となっているのである。マルクスの認識対象は、かかる意味で実践とカテゴリーなのであ

(もちろん、人間にとって役に立たない、欲求充足の妨げになるというように)と捉えている。この説明は、対象をあるがままに認識することができるというように思い込ませる。認識は、対象の反映であるというように思い込ませる。

すなわち、この場合「資本」カテゴリーの共示的内容が実践(労働)対象と結びつけられる。共示的内容は文化的、社会的に与えられているのであるが、これが実践対象の属性から引き出されていると思込ませる。かくて、この認識から引き出されることは、対象の歴史性を消失させることである。

これは、プリエトの言っている対象から必然的に由来してくるように思われる「自然化された」認識、あるいはイデオロギー的認識ということでもある。¹¹⁾私はイデオロギー的認識というのは実践の対象を人間にとっての効用から判断するとき生じる認識であると、つまり(a), (b), であると考えている。

「資本=労働手段」とする認識の仕方は、分析すると二通りに分類できる。すなわち、(a)「資本は労働手段である。」(b)「労働手段は資本である。」というように。実際には人々の認識の仕方は、(a), (b), を混在させている。

(a)では、資本が労働手段という意味を付与されている。資本は具体物としての「労働手段」によって容易にイメージされる。(b)では、労働手段が資本

る。価値実践の対象は(価値範式によって分類されている)価値カテゴリーとして認識対象となり、価値範式によって意味を付与(認識)される。

ブルジョア経済学の批判の「書」である「資本論」についてプリエトは次のように言っている。「資本論」は特定の視点から資本主義的生産様式を研究するものではなく、それがなそうとしているのは、当の生産様式のような物的現実を認識する仕方の関与性を生み出す特定の視点を明らかにすることなのである。」(プリエト、前掲書、218頁)

「関与性」とは「資本論」のタームでいうならば使用価値実践の志向性、価値実践(社会的実践)の志向性に照応する。つまり、実践によって「認識対象」が惜定され、認識のための範式が生み出されている。

10) James. Mill 『Elements of Political Economy』(J・ミル、『経済学綱要』渡辺、訳 17頁)

11) Luis. J. Prieto, 『PERTINENCE ET PRATIQUE』(L・プリエト、『実践の記号学』丸山・加賀野井、訳 221頁)

という意味を付与されている。この場合、資本をなんらかの具体物で説明するのはむづかしい。なぜなら、或る人にとっては労働手段は資本であるかもしれないが、他の人にはそうであるとは限らない。したがって、資本は更なる説明を要する。この場合、説明の連鎖が長くなればなるほど論理整合性が得られなくなる。もちろん、(a)の場合でも論理整合性が得られないというのは同じである。

資本は価値範式で、労働手段は使用価値範式によって意味を与えられるからである。

換言すると、それぞれ違う範式（コード）に属している用語が、資本＝労働手段として置き換え可能とされているのである。

したがって、論理性を追求すればするほど論理の不整合性は明らかとなっていく。¹²⁾

さて、資本＝労働手段とした対象において説明すべきものとして、すなわち認識対象として資本をとるか(a)、労働手段をとるか(b)、の違いは何に由来しているのでしょうか。いうまでもなく、それは対象に働きかける態度（実践）の違いから生じている。(a)の場合はⅡであり、(b)の場合はⅠである。

(a)の場合、実践も、それが働きかけている対象も価値化、量化しているのである。ここでは、認識対象は「資本」なのである。認識対象は実践の中に含まれている。(b)の場合、実践は具体的、個別的であって対象の具体的属性を同化し、それに適応する。対象は実践者に効用をもたらすか、否かという観点から眺められている。それだから認識対象は「労働手段」である。

資本＝労働手段とするのは意識的であるが、(a)の場合のように、資本を認識対象としているのは、説明すべきものとしているのは無意識的である。

資本は労働手段である。というとき、何故、これが認識の対象になってい

12) (a)は表の二に、(b)は表の三に位置する。(a)、(b)はそれぞれに表の一、四に位置することになると論理性を獲得することになる。(前掲1, を参照)

実践 \ 範式	価値	使用価値
価値	(一)	(二)
使用価値	(三)	(四)

るか、については彼は無意識的であるが、(実践)対象それ自体は人間の欲求を充足させるものとして存在していると考えている。それ故に、資本は人間の欲求を充足させるための労働手段と置換される。資本は労働手段と認識される。

だから、(a)の論述はこの展開を押し進めると価値実践の相互作用によって産み出された現実の諸問題を人間の欲求を充足する行為に還元することになる。

(a)の展開した論述では、例えば人間の欲求充足の妨げとなる低賃金、失業というような問題の生じる原因は、偶然的、あるいは対象に働きかける人間の知識不足、協調性の欠如というようなものに直接結びつけられる。これらを規制している諸要素間(利潤、賃金、投資、貯蓄、利子、……)の関係が考察されていくのだが、要点は結局は人間性に帰着されて我慢すべきこととされる。

(b)の「労働手段は資本である」は、現実を人間の欲求充足という観点からみていくから、この展開は、上述の諸問題を生み出している経済の動き(価値実践の相互作用)は人間の欲求を充足するには程遠く、むしろ非人間的であるということに帰結していく。使用価値範式でまとめられる諸カテゴリーのグループ(「労働手段」カテゴリーはこれに属している。)がここでの認識の対象になっているのであるが、これは、認識者の実践、あるいは認識者が仮託した実践の内に含まれていることなのである。

(a)にしる、(b)にしる、それを押し進めた論述は、現状(価値実践の相互作用)の肯定、あるいは批判というようにその帰結するところは相違していてもその論理は人間の本性に還元するという点では同じになっているのである。

人間の本性に還元することになる、つまり一義的欲求の充足という観点からの対象認識は、対象によって決定されている、あるいは対象をあるがままに反映したものというように一般的に考えられている。いわゆる「素朴経験論」と呼ばれる認識である。

カテゴリーの形成を問題にするのは、彼が無意識に選び取った認識対象（a, なら「資本」。b, なら「労働手段」。）を同化し、それに適応する実践と関連づけることである。価値実践者は「資本」を、使用価値実践者は「労働手段」を選び取っている。

このような事態が生じることを如何なる理由によって説明することができるであろうか。

価値実践は経済システム（価値実践の相互作用）と一体化しており、価値実践者は当然このシステムを容認することになる。つまり、価値実践の相互作用が産み出している世界観を価値実践者は自己のものとしており、これが認識対象として価値カテゴリーを無意識的に選択することになるのである。

使用価値実践は、経済システム（価値実践の相互作用）と対抗的である。使用価値実践者はこれを批判することになるからである。「批判する」というのは価値実践の産み出している世界観を拒否しているということである。

資本＝労働手段を置き換え可能としているのは、価値実践者、使用価値実践者それぞれの表象の内にある。彼らの表象は、おおよそ重なりあうものである。しかし、価値実践者は労働手段によって殖やすところのものは価値（貨幣）であると考え。つまり、実践の志向しているところは価値増殖である。使用価値実践者は資本は生活水準の向上のために、生活手段量を増大させるために存在していると考え。

「容認する」あるいは「批判する」ということは認識対象の認識に先行している。

実践者が自己の実践の対象を容認するということは、彼が無意識的に選び取っている認識対象に既に現れている。かかる意味において実践者は実践対象と一体化している。一体化（価値実践者は、この一体化を意識しているわけではない。）は、その実践に照応した範式によってまとめられる諸カテゴリーを認識対象にすることである。実際、価値実践者の対象はそうになっている。

使用価値実践者がその実践に照応した範式によってまとめられるカテゴ

リーを認識対象とすることは、当然、彼の実践対象を容認することになるが、この対象は社会的ではないから、社会的である現実の経済システム（価値実践の相互作用）の批判となっていく。

使用価値実践者は自己の実践が社会的でないが故に自己の実践に意識的たらざるを得ない。したがって、彼は認識対象の惜定についても意識的となる。ここで、マルクスが述べている「建築家と蜜蜂」の例を想起してみよう。¹³⁾「建築家と蜜蜂のうち、建築家だけが実践の担い手であると考えられるが、それというのも、建築家が自分の変形しようとする現実を認識しているのに対して、蜜蜂は——少なくとも推測される限りでは——そうでないからである。」¹⁴⁾

使用価値実践は社会を変革しようとする実践であり、その実践は社会変革のプログラムを必要とするから建築家の実践ということが出来る。蜜蜂は明らかに価値実践者ということが出来る。なぜなら、価値実践はその実践の対象である社会に対するどんなプログラムも必要としないからである。価値実践の相互作用としての社会は、個々の価値実践者をして、あたかも蜜蜂が種としての本能でもってその再生・維持を図っているように社会を維持せしめているのである。価値実践者が自己の実践を根拠づけるプログラムと使用価値実践者がそれを根拠づけるプログラムとは明らかに異なるのである。後者のプログラムは前者のそれとは違って社会に対して開かれている。後者の実践は社会生活の中に根拠づけをもつようになる。

価値実践を使用価値実践に置き換えるということは、価値実践者が無意識的に採用している実践対象を認識する仕方を変えるということでもある。社会の変革はこの両輪によってなされているのである。

経済諸カテゴリーの形成ということで意味していることを要約的に言うとな次のとおりである。価値実践と使用価値実践の二重性はそれらの表現体（カテゴリー）を絶えず産み出し、再生している。対象の認識、対象の解明とは

13) K・マルクス『資本論』1, 向坂・訳 5章, 「1節, 労働過程」

14) プリエト, 前掲書, 228頁

社会的実践（価値実践の相互作用）によって産み出されたその表現体（シニフィアン、すなわち諸カテゴリー）を統一的に価値実践の相互作用に位置づけることである。換言すると、それは価値実践の相互作用の表現体系に位置づけられている諸カテゴリーの読み取りである。価値実践の相互作用によってカテゴリーが形成されているということに無知であることは認識対象、及び認識が依拠している範式の存在に無知ということである。

このようにみえてくると実践と認識は切り離すことができないということになるであろう。

カテゴリーの形成をみることによって、つまりこの読み取りによって「自然化された」認識、つまり対象を「ありのまま」に認識できるという主張のイデオロギー性が明白となる。プリエトは次のように言う。「或る全体集合にぞくしている諸対象を認識する仕方は、常に、或る種のやり方で、もう一つの全体集合を構成する諸対象に働きかけようとしている——もしくは逆に、前者の全体集合を構成する諸対象に働きかけようとしているような、後者の全体集合に属する諸対象を認識する仕方から由来してくる。従って、その認識の仕方は、常に実践を含んでいるのである。他方、全ての実践は、それが働きかける現実の認識を含んでいるのだから、認識と実践とは切り離せないものである。」¹⁵⁾ 一般的には「社会」を認識するということは社会的実践によって生み出されているカテゴリーに意味を付与することである。プリエトの全体集合をカテゴリーの集合と考えると私のいう実践と認識の不可分離とは、彼の、あるいは彼女の実践によって与えられている認識対象を同じく社会的実践によって既に与えられている範式で彼、彼女が意味を付与することである。すなわち、実践の対象を認識する仕方は実践の質によって認識対象が規定されていること、及びそれを認識する範式もまた実践によって社会的に与えられているということである。

以上、述べてきたことを要約すると次のようになる。

15) プリエト、前掲書、212頁

1. 価値実践の対象は経済システム（価値実践の相互作用）である。
2. 価値実践は社会的実践（価値実践の相互作用に参加している実践）であるから実践の志向するところは社会的に容認されている。したがって、その志向性については個々の価値実践者は無意識的に身につける。つまり、その志向性それ自体を意識することはない。
3. 使用価値実践の対象は経済システムである。
4. 使用価値実践は社会的実践に対抗するものであるから実践の志向するところについては使用価値実践者は意識的である。
5. 価値実践者は認識対象がどのようなものであるかについて意識的ではない。価値実践者の認識対象は価値範式によってまとめられる諸カテゴリーである。
6. 使用価値実践者の認識対象は使用価値範式によってまとめられる諸カテゴリーである。使用価値実践者は実践の志向するところについて意識的であるから、認識対象の措定についても意識的である。彼らの措定した経済システムは価値実践の相互作用とは相異して自然的、生態系的に規制されたところのものである。彼らの解釈にみられる論理的不整合は実践の対象と認識対象の相異に帰因している。
7. 実践の対象と認識対象との間には溝が存在している。
8. 一般的には人々は、自己の実践が価値的であるのか、使用価値的であるのかということについては関心もないし、意識もしていない。だから、彼らには実践対象と認識対象の区別は存在しない。
9. このような人々の認識の仕方に依拠している彼らの解釈が社会の基本関係の維持に関わっているから、社会の再生産を解明するためにはこの認識の仕方を認識対象としなければならない。
10. このような人々はカテゴリーは実践の対象を「ありのまま」に反映していると考えている。また、そのようにあることが「客観的」であると考えている。
11. 本稿でいうところの認識とは認識対象としてのカテゴリーを価値実践

の相互作用に位置づけ、それを読み取ることである。

三、「剰余」カテゴリー

リカードの理論（「経済学および課税の原理」）を当時の他の諸理論と比較してみて、すぐに気がつくことは「富」に関する叙述が理論の展開に何らの役割も果たしていないということである。このことは「生産的、あるいは不生産的労働」に関する当時の一大論争に彼は、関心を寄せなかったという事実にもつながる。

それは、富を生産する労働が一般的には生産的労働として関連づけられるからである。

「富」、あるいは「生産的労働」についての諸論述が経済理論の形成に果たしている役割を検討してみよう。リカードは「価値」と「富」を区別して経済学の対象は「価値」であることを明確に認識していた。¹⁶⁾リカードをのぞいた論者達は、「富」を経済学の中心課題としていた。彼は「富」についての論議を避けた。このことは、論者達が「富」を通して論議していたものを避けたということなのである。

マルクスがリカードを古典派経済学の完成者として評価するのは彼が労働時間による交換価値の規定を最も純粋に定式化したからである。ただし、この規定が剰余価値論に直結するという考えのもとに評価している。W・ペティからリカードに至るイギリス古典派経済学を価値論の純化の過程としてマルクスは位置づけている。純化の過程というのは、経済学の諸カテゴリーが素材的内容から分離し、抽象化していく過程とされている。¹⁷⁾

私は、この節で「純化の過程」と言われていることの意味をみていくつも

16) D・リカード、『経済学および課税の原理』「20章、価値と富、それらの特性」堀・訳

17) K・マルクス、『経済学批判』「商品の分析のための史的考察」大内・武田・訳

りである。

リカードに至るまでの彼らの論述は、認識対象において、例えば、A・スミスをみてもそれは価値カテゴリーであったり、使用価値カテゴリーであったり、混在しているのである。前述したように使用価値カテゴリーは、価値カテゴリーが指示物を具体的に特定できないのに対して、その指示する対象を知覚的に把握することができる。マルクスによって「カテゴリーが素材的内容と未分離」であると指摘されたとき、そのときのカテゴリーは使用価値カテゴリーということである。

スミスが研究したのは「諸国民の富の性質と諸原因」である。

彼が「富」とは生活の必需品、便宜品、および娯楽品であるというとき、私達はその素材的内容を即座に表象することができる。したがって、その増大についても生活水準の向上として感覚的に捉えることができる。

スミスに先行している理論、重商主義 (Royal mercantilism)、重農主義の理論においても関心は「富」であった。それは如何にして「富」を増大させることができるか、ということであった。そして「富」は素材的に把握可能となっており、したがってその増大も具体的に捉えることができるようになっている。これは、それぞれの論者の実践、あるいは彼らが仮託している実践と、理論に想定されている経済主体とが結びついていることを示している。

スミスの場合は実践主体、つまり「富」の増大を図るのは国民であるのだが、先行する理論ではそれは国家であった。「国富という概念自体が17世紀の経済学者のあたりにしのみこんだのは——この考えは部分的にはなお18世紀の経済学者にも続いてみられるのであるが——富はただ国家のためにだけ創造され、しかも国家の力はこの富に比例する、という形においてであった。」¹⁸⁾ 国家にとって富は具体的なモノである。認識対象としての「富」は使

18) 「経済学批判序説」「国富の概念そのものも、17世紀の経済学者たちの見解には、富はただ国家のためだけにつくりだされるもので国家の力はこの富に比例するという考え方——一部は18世紀の経済学者たちにもまだ残っている考え方——としてののびこんでいる。」(前掲書、『批判』324頁)

用価値カテゴリーである。実践（労働）の対象は知覚的である。知覚的でなければ実践対象にはならない。

「富」の増大は、ケネーにあっては土地からの生産物の増大によってなしとげられる。重商主義にあってはそれは、貿易差額の順によってなしとげられる。したがって前者では土地に投入される労働が生産的であり、後者では「その生産物が外国に送られて、それらに費やされたよりも多くの貨幣をとりもどすような生産部門」に投入された労働が生産的であるとされている。

「富」が素材的に画定されるように生産的労働も具体的に画定される。「富」の内容を、したがって生産的労働を画定しているのはそれぞれに想定されている実践主体（この場合、国家）である。いかなるモノを「富」とするかは、実践と不可分なのである。「富」の増大に努める実践、つまり剰余の領有という実践が或るモノを富とし、剰余を確定していく。実践の志向するところが、社会の志向するところと一致しているならば、あるいは社会の受容するところであるならば、その実践は社会的であるといえることができる。

スミスにいたって実践主体は個々の国民と想定されるようになった。それぞれの論述において明示されていないが、想定されている実践主体は一つの重要な役割を果たしている。論者は、剰余の領有という実践と社会（＝共同体）を統合しようとする実践の一致を暗黙に想定している。換言すると、富の追求を原理としている社会が想定されている。「自然による統治」(Physiocratie)は、「富の増大」によって果たされると重農主義者は考えていた。¹⁹⁾分業による生産力の上昇とは社会的に物資が豊かになることであり、これは貧富の差を解消させるのではないが、しかし最低層の人々の生活水準を上げることになり、社会秩序を安定せしめるとスミスは、考えている。²⁰⁾

剰余の増大、領有の実践は、彼らの論理展開の動因である。重商主義、重農主義、スミスの論述における経済カテゴリーをこの視点からみることがで

19) 木崎喜代治、『フランス政治経済学の生成』117頁

20) A・スミス『諸国民の富の研究』(1) 大内・訳、78頁

きる。

スミスにいたって想定されている実践主体が先行する論述におけるそれとは違っているのは、先行する論述における社会とはスミスが所与している社会そのものが変質しているということから生じてきているのである。個々のセルフ・ラブ、セルフ・インタレストの追求が、社会的には神の見えざる手によって調和するという考えを産み出している市場社会がスミスの前提にしている社会である。他方、重商主義、重農主義の想定している社会は、市場に依拠してはいるが、貴族の権威に立脚した社会である。

「生産的労働、不生産的労働」についての論争が、スミスの規定から出発し、これをめぐって行われているのは、論争において無意識的に想定されている社会が、スミスの場合と同質であることを示しているのである。ケネーの生産的労働について言及するときも、ケネーの想定している社会を彼らは自己の想定する社会と同視しているのである。

各論者が無意識的に想定している社会が同質であるということから、この論争は深化するにしたがって論争そのものが消失していくということになった。逆に言うと、「生産的労働、不生産的労働」論は背後に「社会」「実践」というものがあってこれらが、その論争を規定しているのである。

換言すると、この論争が内包していた核心である如何なる「社会」「実践」を想定するかということが消失してしまうと、論争の収斂するところは必然的に「利潤」を獲得する、あるいはそれを助ける労働（資本に雇用された労働）が生産的であるということになる。こうなると論争そのものがなくなり、リカードのように分配のメカニズムをあつかうようになってくる。

なぜなら、所与の社会（資本主義社会）を支え、律している「利潤」獲得の労働（実践）は、所与とされているからである。

論争の核心の消失は、論争を形骸化し、マルクスが指摘しているように筆達者なディレクタントや教師ふうの概説書執筆者たちが取り扱うところとなった。

「社会」——「実践主体」——「富の内容、生産的労働」というこれ

らの用語は緊密な相互関連性にある。「社会」、「実践主体」の想定が各論者によって異なっているのであれば、「富の内容、生産的労働」についての論争は現実の「社会」を擁護するか、批判するかということをめぐる活発になされるであろう。

この論争が、内包しているものは生産的労働論を基礎に構築された理論は如何なる「社会」、「実践主体」を想定することになるか、ということと「富」の増大によるその社会の維持、ということである。したがってこの論争から「社会」、「実践主体」の質を問うということがなくなる（「資本」カテゴリーの形成を問題にしない）と後の論点は資本蓄積論に向かっていくのである。（スミス、マルサスの論述のうちに確認するであろう。）

マルクスが「生産的労働とは、労働能力が資本主義的生産過程において登場するところの全関係および仕方様式の簡略な表現であるにすぎない。」²¹⁾と述べているのは、生産的労働を通して論議されていることは「社会」、「実践主体＝価値実践」のことだということである。各論者が意識的、あるいは無意識的に想定している社会が資本主義社会として確定してくると生産的労働は、資本に雇用された労働ということになる。

「如何なる労働が生産的労働か」ということについての論争は、「社会」そのものを問題にするとき生じてくる。現実の「社会」を批判する、あるいは擁護するときに、また、あるべき「社会」を問題にするときは常に生じるのである。

P・バランの「経済余剰」のカテゴリーを想起すればよいであろう。彼は「現実の経済余剰」と「潜在的経済余剰」を対置して現実の経済システムを批判的に考察している。資本主義経済の下では、「潜在的経済余剰」は増大する傾向にあると論じ、この潜在している余剰を実現するために社会構造の変革を主張している。

批判を可能にさせている「潜在的経済余剰」カテゴリーの適用の困難性、

21) K・マルクス『剰余価値学説史』503頁（マル・エン全集：26 I 大月書店）

一般性に欠ける点について彼は承知しており次のように述べている。「このカテゴリー自体が現存の社会制度の範囲を越えるものであり、ただに所与の社会経済組織の、容易に観測可能な行為に関連をもっているだけではなくて、いっそう合理的に組織された社会の、容易に見透しできない映像にも関連をもっている、」²²⁾このように注意を喚起させながら、彼はこのカテゴリーの使用に向けられるであろう批判、つまりそれは、主観的、恣意的であるという批判を予測してこのカテゴリーを使用する根拠を「客観的理性」という言葉に逃がっている。むしろ、バランは人々が主張している社会認識の客観性、科学性というものの形式的内容こそ逆に問題とすべきなのである。あるべき「社会」を問題にするときは、実は論者の社会に対する態度、実践の志向性も実は論理の対象にしなければならない。論者はこれについて意識的でなければならない。論理の展開とその実践の志向性のつながりは明白であるから人は直ちに問うであろう。実際、論者の立場を示している実践が、社会的実践と対抗的であるならば、当然、論者は自己の志向するところに意識的たらざるを得ない。社会が現実追求している「富」を批判することによって、あるべき社会を主張する。

しかし、実践の志向性も論理の対象にしなければならないということは、この場合に限られたことではないのである。生産的労働についての論争が内包していたものを便宜的に二つ（「富」とは何ぞや、「富」の増大、）に分けたのであるが、実際的には、すなわち現実の存在としては両者は一体である。「富」の増大という論点は、資本蓄積の問題になっていくのであるが、これは資本主義社会を前提にしているのであり、したがって資本主義社会の実践主体（合理的経済人）が前提になっている。この前提を忘れるところから認識の客観性、科学性という主張が生じるのである。あるいは、この主張は合

22) PAUL A BABAN 『The Political Economy of Growth』「潜在的経済余剰、すなわち利用しうる生産諸資源を用いて与えられた自然的・技術的環境のもとで生産されえたるはずの産出量と不可欠な消費とみなされうる量との間の差額」P・A・バラン『成長の経済学』 浅野・高須賀・訳、30頁

理的経済人を人間の本性を表現しているものとしてあらゆる社会に登場させることによって補強される。それでは、資本の蓄積を説明するとき、実践の志向性をも説明の対象にしなければならないというのは、どういうことであろうか。

社会の実践対象を認識するとき注意しなければならないのは、既に述べているように認識対象がカテゴリーであるということである。実践対象と認識対象との間に存在する溝に気がつかない人はカテゴリーは実践対象を「ありのまま」に写しとっているという錯覚に陥る。彼らはカテゴリーの形成については、つまりカテゴリーの意味内容の歴史性については全く注意を払わない。リカードの資本蓄積論には利潤の源泉についての論述はない。

彼は正の利潤率の存在を前提にしているのである。これは生産的労働論に意識的に関心を寄せなかったことの反映であろう。生産的労働論を排することで、つまり論争への参加を禁欲することでリカードは、基礎命題（投下労働時間による価値の規定）からの演繹的体系を創りあげたのである。「カテゴリーの素材内容からの分離」、つまり価値論の純化とは経験をできるだけ排除した基礎命題の確立によって果たされている。この代償は認識対象の細分化である。

つまり、経済科学は基礎命題を検討の対象とはしない。その仕事は他の適当な科学に任せるというのである。リカードが行った価値論純化はマルクスが高く評価した内容とは異なる。マルクスによるとリカード価値論の徹底は剰余価値論にゆきつくのである。

演繹体系とはモデルであり、これを現実に照応させることになる。演繹体系からはカテゴリーの形成を窺うことはできない。当然のことながら、カテゴリーの形成と直結している実践の志向性についても同様に窺うことはできない。

否、むしろ演繹体系は論者の実践の志向性をできるだけ排除するところにその優点を置いている。換言すると、モデルは決してその作成者の実践の志向性と切断することはできないのに、切断を装うことによって「科学性」

「客観性」を誇るのである。

ワルラスの方法をさらに厳密にしたシュムペーターの「純粋経済学」はそれをよく示している。しかし、シュムペーターの展開は果たして実践の志向性を排除して「客観性」なるものを確保しているのだろうか。²³⁾

シュムペーターの「純粋経済科学」は現実の生活人の合理的経済人への還元を基礎としているのに対してマルクスの「経済学批判」は想定されている合理的経済人を生活人へ還元していくことによってなされている。換言すると「純粋経済学」の世界は正の1次導函数と負の2次導函数をもつ効用函数によって示される同質的、原子的諸個人の世界である。シュムペーターはこの世界をあらゆる社会形態に適用する。原子的諸個人の行動から演繹される体系は論理整合的である。かかる体系が現実世界に適用されるとこれは、現実世界を正当化する役割を果すのである。

マルサスの生産的労働。

「経済学原理」の第1章は「富の定義および生産的労働について」である。しかし、不思議なことに「1章」は後続の章に論理的つながりをもっていない。「1章」を省いても「経済学原理」におけるマルサスの論理には何の影響もないであろう。

「富」の定義に関連してマルサスは「リカード氏が富と価値のあいだに明確な境界線をひくことによって経済学に貢献するところ大であったと考えざるをえない。」と述べる。

しかし、リカードが「価値」カテゴリーで経済学の対象を構成し、素材と

23) シュムペーターの『理論経済学の本質と主要内容』(大野・本村・安井・訳)の「2章」で説明されている彼の方法は、まさに認識対象の細分化である。

また、ホルリスとネルは純粋経済学(新古典派理論)について、この理論は誤りではないが適用不可能であり、論理的に不可能ではないが、実行不可能であると特徴づけている。これは新古典派理論における諸変数の担い手が現実世界には存在することができないということからの帰結である。

Hollis and Nell

『RATIONAL ECONOMIC MAN』(『新古典派経済学批判』末永・訳127頁)

結びつく「富」という用語を経済学の領域から排除しようとしたのに対し、マルサスは「富の増大に影響を与える諸原因の研究をおもな目的とする科学に関する著作においては、われわれがその増減を測定しようとしているところの対象のある定義をさがし求めるのは当然であるように思われる。」として、「富をもって、人類に必要で、有用な、または心地よい物質物である」と定義する。そして富を生産する労働を生産的労働と規定している。

マルサスは生産的労働を資本の循環に位置づけていくのであるが、このことが生産的労働の規定を不必要としていくのである。むしろ、資本の循環を維持するために不生産的労働者が必要な消費者として評価されるようになる。マルサスは、次のような区別から生産的労働を画定する。資本は分業、機械の使用に絶対的に必要であるから、これが富を増進するのは明らかである。

そこで、(一)資本に雇用される労働と収入によって用いられる労働の区別。

(二)貯蓄が資本として使用されるか、それとも収入として使用されるか、ということから前者によって雇用された労働と後者によって用いられた労働との区別。

(三)年々の生産物と消費との均衡で生産物が、消費を上回ると資本を殖やす手段が与えられる。逆ならば、早晚、生産物の供給が減少していく。この均衡のどちらに力をかけているかによる労働者の区別。

これら(一)(二)(三)は利潤をもたらす労働者とそうでない労働者の区別によって説明される。このことは資本を規定することに係っているが、マルサスにおいては「資本」は利潤を目的として使用される資材なのである。²⁴⁾「資財」は具体的に把握することができるから、「資本」も同様に把握できるということになる（価値カテゴリーが使用価値カテゴリーによって意味を付与される）。確かに、これはマルサスの理論を性格づけることなのであるが、リカードとの論争にみられるように価値カテゴリーでの説明に努めている。それは、生産した生産物の素材的内容によって労働者を生産的、あるいは不生

24) R・マルサス『経済学における諸定義』玉野井、訳 175頁

産的であると分類しようとしているのではないところに示されている。マルサスは上述の区別立てを發展させて次のように言う。(I)「もしわれわれが、富を具象的な物質物にかぎることがなければ、われわれは、一切の労働を生産的とよび、ただその生産的な程度を異にしているのだ、といってもいいであろう・・・・・・・・・・例えば、すべての労働は、それに支払われた価値の大きいさだけ、またさまざまな種類の労働の生産物が、自由競争価格で売られた場合に、それに投下された労働の価値を価値において越える程度に比例して、価値を生産するのだといいえよう。

・・・・・・・・・・富を生産すること最も少ない労働は、その成果が交換価値においてこのような労働に支払われた価値に等しいだけで、したがって実際に用いられた労働者以外は社会の階級を扶養することなく、ほとんどまたは全く資本を更新することなく、また将来の生産をたやすくするような蓄積に直接かつ有効に向かっていくことも最も少ないものであろう。」²⁵⁾

このように販売価格—費用 >0 ，であればこの商品の生産に投入された労働は生産的である。この商品に対して需要が大きくなれば、販売価格は上昇していく。これはこの商品に投入された労働をより生産的とすると、マルサスは解釈するのである。

働は生産的である。この商品に対して需要が大きくなれば、販売価格は上昇していく。これはこの商品に投入された労働をより生産的とすると、マルサスは解釈するのである。

「生産的労働，不生産的労働」に関するこのような考察方法の利点を次のように述べる。

「この方法は、資本の蓄積，資本と収入との区別，節約の性質と影響，生産と消費の均衡にかんするアダム・スミスのすべての推論に，生産的および不生産的という言葉のかわりに，より多くあるいはより少なく生産的という言葉を用いるだけで，十分に符合するものであって，なおそのうえ，資本お

25) R・マルサス『経済学原理』 小林時三郎・訳，59頁

よび熟練とより生産的な種類の労働との必然的な結合をたえまなく見守るという利点をもつであろう。』²⁶⁾

マルサスの生産的労働は、A・スミスの「言葉」をかえたというに留まらず、生産的労働論が内包している核心、つまり「社会」「実践主体」をいかに把握するか、を消失させてその代わりに「資本主義社会」「資本主義社会を支える実践（価値実践）」を暗黙に受容している。つまり、それを自明なこととしている。

このことは、「生産的労働論」はマルサスがいうところの「資本蓄積論」に集約されるということが示している。しかし、彼は「富」「生産的労働」についての定義としてはA・スミスの定義を固守している。私は、マルサスがスミスの生産的労働についての定義に固守している積極的な理由がよくわからない。

この定義は、彼の論理展開の冒頭（一章）に与えられているのであるが、論理展開には出てこないのである。その定義というのはいこうである。「社会的富または個人的富の名のもとに、物質物によって人間の欲求を満たすあらゆるものを分け、ついで、富を直接的に、すなわち生産された者の価値で測られるほど直接に、生産するというすべての種類の労働を生産的とよぶことは、この主題が認めるもっとも自然で有用かつ正確な分類であろう。』²⁷⁾みられるように物質物に富を限定し、しかも価値によって測定されるという富を生産する労働が生産的であるというのである。物質物としての富を生産する労働という規定は、上述の「資本の循環（蓄積）」の展開にはめこむのは煩雑さを増すし、その展開の妨げとなるであろう。

ここで注意しておかなければならないことがある。私はマルサスが生産的労働論を発展的に解消することになるものとして引用している部分は「二版」では削除されているのである。「削除」している部分と「富」について

26) マルサス、前掲書、63頁

27) マルサス、前掲書、73頁

の定義からの展開とは整合的ではない。したがって、マルサスが「富」の定義を固守することによって(I)を削除しているのは理解できるが、彼の論理展開からするとむしろ逆であるだろう。

人間の欲求を満たすところの物質物という「富」の規定は、その内容が論者に共通のものとして理解されることはマルサス自身が承知しているように困難なことである。しかも、「社会的富」の定義となれば尚更であろう。これは、論者が暗黙的に念頭に置いている社会によって影響されるからであろう。

マルサスが、スミスの定義を固守してはいるが、それを自己の論理には生かす必要のない理由がここにある。つまり、マルサスは現状の資本主義社会を受容しているから。

スミスの生産的労働

「(一、) 労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、このような結果を全然生まない部類のものがある。前者は、価値を生産するのであるから、これを生産的労働と呼び、後者はこれを不生産的労働と呼んでさしつかえない。こういうわけで、製造工の労働は、一般に、自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反して召使の労働はどのような価値も付加しない。なるほど、製造工は、自分の賃金を自分の親方から前貸ししてもらっているけれども、ういう賃金の価値は、一般に、自分が労働を加えた対象の増大した価値のうち利潤をともなって回収されるのであるから、実は主人になんの費用もかからない。ところが、召使の生活維持費は決して回収されないのである。……………(二、) 製造工の労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりするのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、すくなくともしばらくのあいだは存続するものなのである。それは、いわば、ある他のばあい必要に応じて使用されるために、貯蔵され、貯えられる一定量の労働である。……………これに反して、召使の労働は、ある特定

の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりはしない。かれのサービスは、一般的にはそれがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまうのであって、あとになってからそれとひきかえに等量のサービスを獲得しうるところの、ある痕跡、つまり価値をその背後にのこすということがめったにないのである。』²⁸⁾(一)の規定と(二)の規定はマルクスによって正しい規定と誤った規定というように評されている。マルクスが評しているように確かに(一)の規定と(二)の規定は異なっており、分離しているように解釈できるのであるが、スミスは何故、両規定を併存させているのであろうか、という点から考察してみよう。(一)の規定における、付加された価値は具体的にはどのようにして人は知覚するのであろうか。生産したモノを売って、それで得た貨幣量がそのモノの生産、販売のために投入された貨幣量よりも大であるとき、その差額の貨幣量としてそれを知覚するのである。したがって、(二)の規定はこの生産物の軌跡（変態）をみるためのものと解釈され得る。(一)と(二)に立脚して「価値循環」という考えが生じるのである。

「価値循環」という抽象論（資本カテゴリー）の確立によって(二)の規定は背後に退くことになる。すなわち、具体的に知覚できるか、否か、という問題、つまり生産的労働を具体的に画定するという問題は消えるのである。マルクスはスミスにあっては科学的なもの（価値論の純化の方向）と非科学的なものが混在していると評しているのであるが、出来上がった論理（価値循環）からみると確かにそうであろう。しかし、(一)(二)の両規定が「資本に雇用された労働が生産的労働」というマルクスのいう正しい規定の基礎にあるのだということを忘れてはならない。すなわち、この規定の実体的根拠を探求するときは、必ず(一)(二)にゆきあたるであろう。

28) スミス、前掲書、522頁

四. あらゆる社会形態に共通の規定について

宇野の「資本論」解釈の主な特徴の一つは、「労働の二重性が商品に表示されている」という表現に示されている「資本論」の論理の核心を無視していること、あるいは理解できていないということから生じている。宇野に依拠している伊藤は次のように述べている。「マルクスにあっては商品価値をはじめから抽象的人間労働の結晶として実体的に規定する論理構成に妨げられて、人間生活の永久の自然条件として労働過程を考察するさいに、労働の二重性を商品の価値関係から分離可能な経済生活の原則として明確に規定しえなかったのである。」²⁹⁾伊藤はマルクスにおいて不明確であったところを明確に規定して論理を深めたとして宇野を評価する。

宇野は言っている。「全体としての生産手段、労働力をそれぞれの部門に配分すること、そして効率的に使用することは、あらゆる社会に貫徹している原則である。」この「原則」から宇野は具体的有用労働、抽象的人間労働という労働の二重性は、あらゆる形態の生産過程に共通する労働の性質であるという解釈を引きだしている。

マルクスが商品の価値関係から労働の二重性を分離しえない論理を展開しているのは彼の論理的苦闘の成果であって「資本論」の最良の部分であると私は宇野とは全く逆の解釈をしている。

「商品に表示された労働の二重性」の理論的意義は、先行する人々の諸論述を検討して彼らの経済認識の仕方を規制している構造を明らかにしているところである。宇野の解釈には労働の二重性についての解釈は存在するが、「・・・表示された (dargestellten)」ということの意味が全く欠落してい

29) 伊藤誠、『価値と資本の理論』152頁 「明確に規定」したという宇野の積極的論点は、『資本論』の「商品に表示された労働の二重性」の節を論理的に有害として省略したところにあるにすぎない。なぜなら、宇野の主張点である「あらゆる社会形態に共通しているという労働の二重性」の中味についての宇野の説明はない。

る。³⁰⁾すなわち、実践と（労働）と実践の表現体となっている「モノ」つまり商品との関係ということが宇野には欠落している。「商品」の分析を通して「労働の二重性」カテゴリーをマルクスは獲得したのであるが、宇野はどのようなのであろうか。

宇野の言っていることをみてみよう。「例えば今仮に6キロの綿花と1台の機械とをもって6キロの綿糸を生産するのに6時間の労働を要するものとして。……この場合、6時間の紡績労働の生産物である6キロの綿糸は、単に6時間の労働の対象化されたものではない。6キロの綿花の生産自身に、例えば20時間の労働を要したものとし、また機械の生産にも一定の労働を要し、この綿糸の生産中に消耗せられた部分を、例えば4時間の労働の対象化されたものとする、生産手段自身すでに24時間の労働を要しているわけである。したがって綿糸6キロは30時間の労働の生産物ということになる。……この紡績過程で行われる労働は、かくして二重の性質をもっている。もちろん労働する者が二度労働するのではないが、同じ労働が二面をもって作用する。すなわち、一面では綿花を綿糸に生産する具体的なマルクスのいわゆる有用労働としてであり、他面では24時間の労働生産物たる生産手段に、新たに6時間の労働を加え、6キロの綿糸の生産に必要な労働30時間の一部を構成するものとしてである。後者は、前者の具体的有

30) 滝沢は「労働の二重性」（人間労働の根源的本質）を宇野のように超歴史的規定と解釈するのであるが、それは宇野にたいする強い思い入れにもかかわらず、（人間労働の根源的本質というものの存在が証明されていないという意味で）観念的であり、宇野の理解とは全く異なった内容である。

滝沢のいうところをみてみよう。物質的生産労働の本質には根源的な二重性が含まれている。それは人間が地上に成り立ってくる瞬間すでにそこに「含まれて」いるところの……人間生活に根源的なものである。この意味における「生産一般」の「本質」は、一人の人の事実に成立と同時に、すでに実際、人間の世界を無条件に支配している。人間が事実に成立するということは、とりもなおさず、その支配に順応してか背叛してか、必ず何らか特定の形と程度において、永遠に現在の・あらゆる社会に普遍的なその本性を反映＝表現しつつ活動するというのである。この反映＝表現の特定の形がすなわち普通という「特殊歴史的な人間社会・人間生活の形態」にはかならない。（滝沢克己『現代への哲学思想』91頁）ここで述

用労働に対して抽象的人間労働ということが出来る。」このように例示して宇野は次のように言う。(一)「具体的有用労働と抽象的な人間労働との二面は、……あらゆる形態の生産過程に当然のことである。」

もちろん、宇野は、次のように注意を促すことは忘れない。(二)「この抽象的人間労働による還元は、あらゆる社会形態に一様の方式で行なわれるものではない。それは生産的労働の社会的規定によって種々異り得る。少なくとも商品経済は他の社会と全く異なった形態をもってするのである。」³¹⁾ここで重要なことは(一)と(二)の関係についての解釈である。換言するとあらゆる社会形態に共通するものとしてのこの「実体」を如何にして認識することができたのか、ということである。宇野はこれについては全く答えない。

実体(人間生活の絶対的基礎をなす労働=生産過程)と形態についての素朴な見方がこの解釈には貫かれている。宇野はマルクスに依拠はしているが、この見方はマルクスのものではない。マルクスの経済学の方法においてその展開の冒頭に位置づけられていた「生産一般」の規定が消えて、実際には「商品」から論じられることになっている。上記に引用している宇野の例示はマルクスにあっては「価値形成過程」として展開されているのである。この点について伊藤は次のように解釈する。「マルクスが商品価値の実体とし

べられている根源的表現関係を滝沢はマルクスの「商品に表示された労働の二重性」に読み込むのである。そして、滝沢は「生産一般と人間の世界にすなわち特殊歴史的な一社会との、真に実在的な切点、すなわち両者のあいだの絶対に不可分かつ不可逆的な包摂関係の要点がある。」(前掲書、93頁)としてこれを宇野の経済原則と価値法則の関係の内に適用していく。

「生産一般は……特殊歴史的なあらゆる生産様式の脚下に横たわる実在的基盤そのものの根本規定、いかえると、歴史的現実的な一人の人の・人としての・生存ないし活動にとって、真に直接的・永遠的な根源的規定を意味する。」(前掲書、91頁)

このように滝沢の「生産一般」に対する理解は観念的であるが、彼の主張していることで見落としてならないことは、人はマルクスに依拠して簡単にブルジョア経済学の「批判」を語るなのであるが、「批判」の根拠については無関心であるのたしい、彼はこの根拠を「生産一般」に求めているということである。

31) 宇野弘蔵、『経済原論』88頁 宇野弘蔵・著作集1

てのみ取り扱っていた抽象的人間労働の側面を、有用労働の側面とともに、商品関係から離れても認められる、あらゆる形態の生産過程に当然のこととして明確に規定しているのは、宇野による理論的思索のひとつの重要な成果であった」と。

そして伊藤は宇野の例示している事柄を置塩の価値方程式を援用してスマートに説明する。³²⁾ただし、置塩が価値方程式で規定している「価値」は「商品に表示されている価値」であるのだから伊藤はこの点を訂正する。つまり、「価値」は「生産過程一般に原則的な労働の量関係」を示しているのだから、価値方程式はあらゆる生産過程に適用できると。

私が問題にしたいことは次の事である。

マルクスは「労働の二重性」カテゴリーの獲得に苦闘したのであるが、宇野は如何にしてこのカテゴリーを獲得したのであろうか。というのは、「労働の二重性」についてのマルクスの把握と宇野は決定的に相違しているのであるから、宇野はこの点についてはマルクスに依拠することはできない。しかるに宇野はこのカテゴリーの存在を自明視しているのである。私は宇野が価値の実体と形態の分離になんらの理論的困難も感じていないのは、このカテゴリーの存在の自明視にあると考える。

「労働の二重性」カテゴリーの獲得について宇野は、まず次のように状況を設定する。

「労働力が商品化することは生産過程を一般的なあらゆる社会に共通なものとして把握し得る物質的基礎を与えるものであって、経済学が資本主義社会のうちにかかる抽象的規定を与え得る根拠を示すものといえる。」把握のための物質的基礎が与えられたからといって自動的にこのカテゴリーの獲得に至るというものではない。もし、そうであるなら人々の経済学の基本的な枠組みに差異はないであろう。しかし、経済諸理論の多様性、その流れはこの差異の存在を示している。

32) 伊藤・前掲書 158頁、置塩の価値方程式については、置塩信雄『資本制経済の基礎理論』「1章、価値の決定」

そもそも「労働の二重性」カテゴリーはマルクスに固有のものであって経済学者に共有のものというのではない。したがって、宇野はこのカテゴリーを獲得した自分自身の方法を示さなければならない。しかし、『経済原論』ではこれは示されてはいない。

宇野のカテゴリー獲得の方法を検討することができないので、宇野がこのカテゴリーの把握ということを意識していない事から生じる問題点を指摘することにしよう。

価値方程式は、生産の技術的条件が与えられると一義的に解くことができる。しかし、この解法は種々の労働の一つの労働への還元、熟練、強度の異なる労働の一つの労働への還元ということを前提にしている。置塩の価値方程式に依拠している伊藤は置塩とは相違して「還元」については全く困難を認めていない。これは「労働の二重性」カテゴリーの獲得ということを問題にしないことによる。これら還元は「社会」それ自体によって、つまり社会的実践によって果たされている。

資本主義社会では、一つの労働とは抽象的に人間的な労働のことである。つまりこの社会は普通の人間によって、生理学的意味における労働（抽象的労働）によって支えられ、維持されている。還元は市場における実践（商品交換）によって行われている。人格的依存の関係を基本とする社会の実践は「抽象的」実践（労働）ではない。この関係の下では「労働一般（抽象的労働）」カテゴリーは形成されていない。なぜなら、カテゴリーの形成は社会的実践と不可分であり、この関係を支え、維持する労働（実践）は特定された具体的実践であるから。それは宗教的、血縁的、あるいは軍事的実践であるだろう。社会には必ずその社会的実践を表現しているカテゴリーが存在している、つまり形成されている。このカテゴリーは人々を結びつけているものを示している。このカテゴリーの存在は個々の具体的労働の一つの労働への「還元」が行われていることを示している。「還元」とは還元されるもの（資本主義社会では抽象的労働）への人々の従属化であり、これを媒介にした人々の均質化である。この「一つの労働」によって他の労働が評価される。

「労働一般（抽象的労働）」カテゴリーは資本主義社会の再生産を説明するためには有効であろうが、それ以外の社会の再生産の説明に適用することは上述のことから有効ではなかろう。すなわち、このカテゴリーが形成されていないところに、宇野のようにこのカテゴリーの適用を拡大することはその社会の実践を資本主義社会の実践で置換することになってしまう。これはその他の社会を資本主義社会に向かっているものとしてしまう。これはその社会を構成している基本関係の維持、再生についての把握を不可能にしてしまうであろう。しかし、問題はこれに留まらない。経済カテゴリーと事物の区別に対する認識の欠如、すなわちカテゴリーの形成という視点の欠落、つまりカテゴリーと実践の不可分性という視点の欠落によって、そのカテゴリーが完全な妥当性を発揮している当の社会そのものの把握を誤ることになる。このことについては既に前節で述べていることである。

置塩の価値方程式をあらゆる社会に適用するというのであれば、「還元」を伊藤のように抽象的労働への還元ということでは適用に誤りを生じる。そうであるならば、置塩が述べているようにこの方程式は資本主義社会にだけ適用すべきである。

「物質代謝の過程において、人間は必ず自己の生活に必要なとせられる使用価値以上の生産物を獲得してきている。人間が一日の労働によって漸く一日の労働力を維持するということは、絶対にありえないことである。」³³⁾として

33) 宇野・前掲書 91頁 宇野はあらゆる社会形態の下に共通しているものとしての労働＝生産過程を三つの項目、(A, 労働過程, B, 生産過程における労働の二重性, C, 生産的労働の社会的規定)に分けて考察している。〔経済原論〕2篇1章]

(A)で次のように労働過程を「人間と自然との間に行われる物質代謝の過程の基礎」であると規定する。ここで彼が述べていることは、マルクスの「労働過程」の叙述を要約したものである。(B)はマルクスが価値形成過程として説明しているところの部分である。これを宇野はあらゆる社会形態に共通の規定として解釈している。そしてその展開はマルクスの価値形成過程の説明のように労働、及び労働の对象的諸条件(労働手段, 原材料)及び生産物を抽象的人間労働に還元して無差別一様なものとし、それらを量的差異としてのみ把握し、具体的有用労働によってそれらの

宇野は、何の困難も感じることなく必要労働と剰余労働の区分を、つまり剰余労働（剰余生産物）の存在を人間労働の本源性というようなものに帰着させてしまう。いうまでもなく、論じられていることは（社会的）必要労働と（社会的）剰余労働という社会的次元のことである。ロビンソン・クルーソーの想定を社会にそのまま適用することは肝心な事を見落とすことになる。そもそも「社会的剰余生産物」の規定を人間（個人）と自然の抽象的想定から導出することは誤りであろう。社会の生存（存在）は基本的関係を維持することによって果たされている。そのために人的、物的資源が確保されねばならないのである。社会は構成員の生存を図ることを第一義として作用しているのではない。伊藤は次のように宇野の説明を補完する。「必要生活手段

変態・循環（各生産要素の維持・再生）を捉えようとしている。（これは極めて不十分な展開である。だから伊藤が置塩の価値方程式を援用してその厳密化に努めている。しかし伊藤は価値方程式があらゆる社会形態に適用され得る根拠を示してはなない。）ここから労働の二重性はあらゆる社会形態に実在しているという主張になっている。(C)では「物質代謝の過程において、人間は必ず自己の生活に必要とせられる使用価値以上の生産物を獲得してきている。」ということが述べられる。

(A)は、主体と自然との関係が展開の枠組みである。「社会」は問題とされない。

(B)では社会的生産、(C)では社会的剰余が論じられている。「物質代謝の過程において、人間は必ず自己の生活に必要とせられる使用価値以上の生産物を獲得してきている。人間が一日の労働によってようやく一日の労働力を維持するということは、絶対にあり得ない。奴隷でさえ一日の労働は、奴隷の一日の生活資料以上のものを生産するから、奴隷にせられたのであった。」(宇野・前掲書 91頁) 剰余の存在は自明とせられているようである。しかも(B)との関連から剰余は社会的なるものと考えるのがよいであろう。したがって、ここでの人間は社会的人間ということになる。

(A)で述べられていることが、あらゆる社会形態に共通というのは、マルクスが「社会」を捨象して「労働過程はいかなる特定の社会形態からも独立に考察されるべき」という方法から導出されている。それでは(A)と(B)(C)の関連はどうなっているのだろうか。また、(B)(C)で述べられていることが、あらゆる社会形態に共通しているというのであれば、背後に前提されている「社会」（抽象的人間労働は資本主義社会においてのみ実在根拠を有している。）との関係はどうなっているのだろうか。これについては宇野は明確ではない。ただ(A)(B)(C)から「労働の二重性」をあらゆる社会形態に貫徹している規定であると主張している。置塩は物質的生産が充たさねばならない条件、社会的に剰余が存在しなければならぬ条件をあらゆる社会に共通の規定としている。

の範囲が、生きた労働の体化されている生産物の総体をどの程度下回るかには、技術的に決定される原則は存在しないのであるが、しかし、その比率の量的大小の問題を措けば、両者の差としてあらわれる剰余生産物が産出されているということ自体は、人間社会に共通の経済原則の一面をなしているとみてよいであろう。そうとすれば、必要生活手段に対象化されている必要労働時間と、剰余生産物に対象化されている剰余労働時間とに、生きた労働時間が区分される量的比率には原則がないとしても、両者の区分の存在自体は、経済原則の一環をなしていると考えられる。」（伊藤，前掲書，161頁）

私は、剰余生産物の存在も社会的実践との関わりにおいて考察しなければならないと考えている。なぜなら、必要生産物と剰余生産物の区分は社会的実践によって与えられているのである。ここでいう社会的実践とは基本関係の維持（意識的，無意識的）に結実する実践をいう。基本関係を維持するためには物的資材，人的サービスが投入されなければならない。これをひとまず「剰余生産物」と規定しておこう。人格的依存の関係を基本としている社会では経済領域は自律していない。ポランニーの表現を借用すると「経済」は埋め込まれている³⁴⁾この社会では基本関係が経済システムを一方向的に規制しており，したがって，社会的実践は，直接的に基本関係の表現体の維持に向かうから，まず剰余生産物を画定し，しかるのち構成員の生理的欲求を充足させることになる「必要生産物」を与える³⁵⁾

物的依存の関係を基本とする社会では基本関係を維持することになる実践と剰余価値（利潤）を追求する実践とは一致している。これが価値実践である。セルフ・インタレストの追求が神の見えざる手によって全体としての調和をもたらすという信念はこれら二つの実践の一致を語っている（全体とし

34) K・ポランニー，『人間の経済』「4章，社会に埋め込まれた経済」玉野井・栗本・訳

35) J. Baudrillard, 『POUR UNE CRITIQUE DE L'ECONOMIE POLITIQUE DU SIGNE』(ボードリヤール, 『記号の経済学批判』今村・宇波・桜井・訳) 必要労働と剰余労働の区分をあらゆる社会形態の規定とするのは基礎的(最低)生活必要量がまえもって決定されるということ仮定している。しかし, ボードリヤール

ての商品交換が基本関係の形成と物質代謝を一致せしめている。商品交換の実践は価値実践である。)。したがってこの社会では基本関係の維持のために剰余生産物がまず画定するというのではなく、剰余生産物と必要生産物は同時に画定されるであろう。この社会では価値実践によって全生産物が量化されており、この実践は量の増大を目指している。したがって、これらは同時に画定され得るのである。伊藤のように「生きた労働の体化されている生産物の総体」から「必要生活手段量」を控除して「剰余生産物」を画定するということが経済原則であるということとはできない。あらゆる社会形態に貫徹している規定ということに関連するならば、宇野に比してはるかに厳密な置塩の説明をみておかなければならないだろう。それは次の規定である。(1)、その期において各種生産財を生産するために消耗した生産財量<その期において生産された生産財量、(2)、その期において労働力を再生するために必要な消費財量<その期において生産された消費財量。

さて、(1)(2)に示されている生産財、消費財は物質的財貨に限定されている。

したがって、これが満たされないと社会的代謝が、崩れるというのが彼の枠組である。そして彼は注意深く説明する。まず、(1)(2)は次の問題の解決を前提にしているという。

(一)あらゆる社会に共通する生産財、消費財、及びこれらを生産するための労働の範囲を定めるという問題。(二)社会的に生産方法は種々に存在しており、どのようにしてそれを特定することができるか。(三)労働の強度、熟練度等が異なっているとき、これらの労働を再生するための消費財量をいかにして決めることができるか。

は次のように述べている。「人類学的最低生活必要量なるものは実在しない。どんな社会においても、過剰への根本的要求があり、神の部分、供儀の部分、贅沢な浪費、経済的利潤、これらが最低必要量なるものを残余として決定する。生き延びることの水準を否定的に決定するのは、この贅沢部分の控除であって、その逆ではない。」(80頁) ボードリヤールは「過剰への根本的要求」が社会的実践と不可分であることを見落としている。社会的実践とは「剰余」が利潤の形態をとっていれば資本家の実践(価値実践)である。

確かに(一)(二)(三)が解決されると、(1)(2)は形式論理的には完全であろう。しかし、(1)(2)を実際に適用するとなると、すなわち(1)(2)の实在的根拠を求めると、(1)(2)の基礎にある(一)は具体的に画定される必要がある。この画定は社会的実践と不可分離である。これは、如何なる労働が生産的であるか、という問題と同じ事柄である。この場合、論じられていることは、いかなる社会を想定しているかということが論点を規制しているということであった。(1)(2)の規定は社会的実践のなかで形成されたということを忘れると(1)(2)の適用を誤ることになる。

(一)で論じられていることは、「いずれの社会形態のもとでも絶対に必要な労働と、ある特定社会でだけ追加されなくてはならない労働とを区別」することによって果たされることになる」と置塩は言う。置塩は社会を捨象することによってこの区別をおこなっている³⁶⁾つまり、あらゆる社会形態に適用可能な規定を置塩は社会を捨象することによって獲得している。いうまでもなく(1)(2)は实在的根拠を欠いた規定ということになる。(1)(2)を社会分析の積極的枠組みとして使用するには(1)(2)に实在的根拠を与える必要がある。实在的根拠を与えないこのような方法の欠陥はマルクスが確認したように「社会」の把握に失敗するということである。(2)についても社会的実践を捨象して「必要な消費財量」を画定することはできない。「必要消費財の量」は「社会」によって与えられるのである。实在根拠は(一)(二)(三)によって与えられるのであるが、(一)は社会を捨象することによって解答されており、实在は与えられていない。さてあらゆる社会形態に共通の規定ということについてマルクスの展開をみておくことにしよう。

労働の二重性は次のように説明されている。「すべての労働は、一方において、生理学的意味における人間労働力の支出である。そしてこの同一の人間労働、または抽象的に人間的な労働の属性において、労働は商品価値を形成する。すべての労働は、他方において、特殊な、目的の定まった形態にお

36) 置塩信雄、『再生産論』36頁

ける人間労働力の支出である。そしてこの具体的な有用労働の属性において、それは使用価値を生産する³⁷⁾」

さて、「生理学的意味における人間労働力の支出」は人間の存在を想定している以上、あらゆる社会に実在することは疑問の余地はないであろう。そして使用価値を生産する労働、具体的有用労働もまた同様に然りであろう。しかし、「抽象的人間労働」「具体的有用労働」というこれら単純なカテゴリー（労働一般のカテゴリー）があらゆる社会に実在して入るということはできない。労働一般のカテゴリーは、「富」が主体の活動そのものに源を有するという、しかも、その活動は特定されたものではないということによって成立する。かかるカテゴリーは、「現実の各種の労働のうちのどれひとつとしてはやすべてを支配する労働ではないというような、非常に発展した労働の総体を前提としている」³⁸⁾のである。宇野には「カテゴリー」と「実在」の区別が存在しない。だから「労働の二重性」カテゴリーを疑問を感ずることなくあらゆる社会に適用するのである。

しかしながら、この「カテゴリー」は実践とそれの表現であるところの「モノ」の関係を示している。換言すると、それはその「モノ」を介してのコミュニケーションの構造を示す。つまり「抽象的労働」カテゴリーでもって、例えば古代社会を理解することはブルジョア社会にその社会を還元（翻訳）するだけのことである。古代人を安易に自分自身に似せて解釈することになってしまう。したがって、資本主義社会のカテゴリーである「労働の二重性」をあらゆる社会に適用することは誤りである。「誤り」というのは「適用」することによって当の社会の特性を見失うことになるからである。あらゆる社会に適用可能なカテゴリーの摘出ではなく、むしろそのカテゴリーの各社会における差異を明確にすることが肝要である。マルクスの説明もカテゴリーとそれが指示する実在を明確にすることで理解しやすくなるで

37) K・マルクス、『資本論』1，向坂・訳，61頁

38) 前掲書、『批判』『経済学批判序説』318頁

あろう「もっとも抽象的な諸カテゴリー（例えば、労働一般）でさえ、まさにその抽象性のために、すべての時代にたいしてあてはまる（労働それ自体は実在する）にもかかわらず、なおこういう抽象という規定性（カテゴリー）の点で、それ自身やはり歴史的な諸関係の産物であるということ、そしてそれ（そのカテゴリー）が完全にあてはまるのは、ただ歴史的な諸関係にたいしてだけであり、かつその内部においてだけだということである。」³⁹⁾ マルクスが言っている「あてはまる」というのは、その簡単な抽象的カテゴリーが指示している「モノ」があらゆる時代に存在しているというように私は解釈する。「労働の二重性」カテゴリーがあらゆる社会に存在しているというのではない。

「ブルジョア社会の諸関係を表現する諸カテゴリー」でもってすべての滅亡した社会形態の編制と生産関係を認識することができると、マルクスは述べている。これは次のように説明されている。「ブルジョア社会は過去の社会形態の破片と諸要素とをもってきずかれていますのであり、それらのうち、部分的にはなお克服されない遺物がこの社会でも余命を保っているし、ただの前兆にすぎなかったものが完全な意義を持つものまでに発展している。要するに、人間の解剖は猿の解剖にたいする一つの鍵である。……ブルジョア経済は、古代やそのほかの経済への鍵を提供する。」⁴⁰⁾

しかし、この説明はマルクス自身が注意を促しているように「破片」、「諸要素」、「遺物」の「意味内容」があらゆる社会形態において同じであるというように解釈されやすい。

古代社会からブルジョア社会への発展を猿から人間への進化と同一視することはできない。猿から人間への進化をあつかう場合は「破片」、「諸要素」、「遺物」の意味内容は同じであると解することもできるであろうが、社会認識の「諸カテゴリー」についてはそういうわけにはいかない。マルクス

39) 前掲書、『批判』「経済学批判序説」319頁 括弧は引用者

40) 前掲書、『批判』「経済学批判序説」320頁

は明確に述べている。「経済学的諸カテゴリーの序列はそれらが近代ブルジョア社会のなかでおたがいにたいしてもつ関連によって規定されるのであるが、この関係たるや、それらのカテゴリーの自然的な関連としてあらわれるものの、または歴史的発展の順序に照応するものの、まさに逆である。」⁴¹⁾確かに、カテゴリーの序列（当の社会の解明）についての人々の陥る誤りについてはマルクスの指摘しているとうりであろう。近代ブルジョア社会を認識するための諸カテゴリーが当の社会によって規定されるということは、「労働の二重性」カテゴリーが示しているとおりである。

私はこの点について既に幾度も述べてきた。すなわち、これら諸カテゴリーはブルジョア社会を支えている実践の表現体であるということ、したがって、実践によってそれらは意味を付与されている。人々にとって経済学を規定する最初のカテゴリーは「富」であるが、これらは経済的実践の対象であるということから生じている。

「富」は人々に効用をもたらすところの具体的な「モノ」として通常、理解されている。マルクスの経済学批判の最初のカテゴリーが「富」でなく「商品」であるのは「商品」を彼らの実践の対象ではなくて、実践の表現体であるとしていることによる。マルクスは彼らが求めており、語っているところのものを分析することによって、実は彼らが認識の対象としているところのものが、彼らは意識していないのであるが、具体的事物としての「富」ではなく「商品」というカテゴリーであることを認識したのである。だから、実践（労働）の二重性が表示されているところのものが、「商品」であるというのである。一見したところでは「富」は「商品」なのであるが、ここで留まってはならない。分析を深めなければならないというのが、マルクスである。「富」は実践の対象として具体的に捕捉し得るものであるが、「商品」はそういうわけにはいかない。彼は「商品」であると主張するが、彼女はそれは「商品」ではないと主張する。つまり、人々は「商品」についてあれこ

41) 前掲書、『批判』「経済学批判序説」323頁

れ述べるであろうが、「商品」は価値実践の相互作用を表現しているところのものであるから、人々の経済的關係によって規定されているのである。

ブルジョア社会を認識するためのマルクスの諸カテゴリーは実践の表現体であるという解釈からすると、あらゆる社会形態に共通の規定である「生産一般」について述べておかねばならないであろう。問題は「生産一般」カテゴリーがブルジョア社会の認識にさいしていかなる有効性を発揮するのであるか、ということである。

「すべての生産段階に共通な諸規定があって、それらは思考によって一般的な規定として固定される。」生産一般に関する諸カテゴリーは社会を捨象して、主体と自然との対置から導出されたものである。したがって、これらのカテゴリーは使用価値範式によってまとめられるものであって具体的に「モノ」を指示しており、その「モノ」から内容を引き出している。

「生産上のすべての時代はいくつかの標識を共通にもっており、共通な規定をもっている。生産一般は一つの抽象ではあるが、しかし、それが共通なものを現実に明瞭にし、固定し、したがってわれわれのために反復の労をばぶいてくれるかぎりでは、一つの合理的な抽象である。」⁴²⁾しかし、ここで述べられている「生産一般」はブルジョア社会の再生産の解明（『資本論』の展開）のためにはマルクス自身によって放棄されたのである。⁴³⁾

ブルジョア社会を認識するためにはブルジョア社会を支えている実践を表現しているカテゴリーを対象としなければならないのであるが、「生産一般」を抽出する方法はこの点を消失させて客体としての「モノ」を認識対象としてしまう。したがって、この方法では人々の関係によって特徴づけられる「社会」の認識に失敗するであろう。

42) 前掲書、『批判』「経済学批判序説」294頁

43) 拙稿「商品に表示された労働の二重性」『山口経済学雑誌27巻1・2号』